

Predictors of potentially harmful behaviour by family caregivers towards patients treated for behavioural and psychological symptoms of dementia in Japan

著者	遠田 大輔
著者別表示	Toda Daisuke
journal or publication title	博士論文要旨Abstractおよび要約Outline
学位授与番号	13301甲第4798号
学位名	博士（保健学）
学位授与年月日	2018-09-26
URL	http://hdl.handle.net/2297/00053144

doi: <https://doi.org/10.1111/psyg.12328>



様式4A

学 位 論 文 要 旨

学位請求論文題名

Predictors of potentially harmful behaviour by family caregivers towards patients treated for behavioural and psychological symptoms of dementia in Japan

(Behavioural and psychological symptoms of dementia を伴う認知症患者に対する
家族介護者の potentially harmful behaviour の予測因子)

著者名・雑誌名

Daisuke Toda, Keiko Tsukasaki, Tomoya Itatani, Kaoru Kyota,
Shoryoku Hino, Tatsuru Kitamura

Psychogeriatrics

金沢大学大学院医薬保健学総合研究科保健学専攻

看護科学領域

地域・環境保健看護学分野

学籍番号 1529022013

氏 名 遠田 大輔

主任指導教員名 塚崎 恵子

副指導教員名 城戸 照彦

副指導教員名 表 志津子

背景

高齢化に伴い、家族から介護を受けて地域で生活する認知症患者が増加している。認知症患者の介護は負担が大きく、Potentially harmful behaviour(PHB)をとる危険性が考えられる。PHBは患者の健康に悪影響を及ぼし、Behavioural and psychological symptoms of dementia(BPSD)の悪化に繋がると言われている。虐待に発展する恐れもあるため予防が重要である。しかし、BPSDを伴う認知症患者に対する家族介護者のPHBの実態と予測因子、およびBPSDとの関連性は明らかでない。

目的

BPSDを伴う認知症患者の家族介護者のPHBの実態を明らかにし、予測因子を分析するとともに、BPSDとの関連性を明らかにした。

方法

対象は2014年7月から1年間に、BPSDの治療のためA精神科高齢者外来を初診した患者と家族介護者155組のうち、参加拒否と虐待歴のある8組を除く147組とした。診療録と介護者による自記式質問紙を用いて調査した。介護者のPHBはthe modified Conflict Tactics Scale(m-CTS)を用いて調べ、10の質問項目のうち2点(ときにある)以上の項目が1項目以上あった場合にPHB有りとして判断した。介護負担感(J-ZBI_8)、健康関連Quality of Life(SF-8)、介護状況を調べた。患者の日常生活動作(N-ADL)、認知症状(MMSE)、BPSD(NPI)を調べた。PHB有り群と無し群間で、単変量解析にて各項目を比較し、有意差があった項目を独立変数として、多重ロジスティック回帰解析を行った。本研究は金沢大学医学倫理審査委員会の承認(No.519)を得て実施した。介護者個々の回答内容は担当の医療者に伝えないこと、困ったことがあれば医療者に相談できることを調査用紙に記載した。

結果

分析対象は介護者から質問紙の有効回答を得た133組(有効回答率90.5%)とした。介護者の年齢は 61.6 ± 11.6 歳、女性が89人(66.9%)、続柄は娘35人(26.3%)、息子29人(21.8%)、義娘28人(21.1%)と多かった。介護期間は 31.3 ± 38.5 ヶ月、介護者のJ-ZBI_8は 13.1 ± 7.4 点、SF-8のMCSは 42.8 ± 7.8 点だった。患者の年齢は 82.0 ± 6.0 歳、女性が83人(62.4%)、アルツハイマー型認知症が96人(72.2%)と多く、N-ADL合計得点は 38.1 ± 10.2 点、MMSEは 15.1 ± 7.2 点だった。NPI総点は 22.9 ± 17.5 点、下位項目の易刺激性 2.8 ± 3.4 点、食欲・食行動異常 1.2 ± 2.9 点だった。

PHB有りとして判断された介護者は65人(48.9%)だった。PHB10項目のうち「叫んだり怒鳴ったりした」有りが52人(39.1%)、「荒い口調を使った等」が36人(27.1%)、「施設に送ると言った」が14人(10.5%)と多かった。

PHBの有無群間で比較した結果、有り群は息子が多く、義娘が少なかった。有り群はJ-ZBI-8が高く、SF-8のMCSが低く、N-ADLが低かった。さらにNPI総点が高く、下位

項目の興奮、無気力、易刺激性、異常行動、睡眠、食欲・食行動異常が高かった。多重ロジスティック回帰解析の結果、介護者の続柄が義娘(OR:0.17, 95%CI:0.05-0.57, p=0.004)、J-ZBI_8(OR:1.09, 95%CI:1.02-1.16, p=0.012)、NPI 下位項目の易刺激性(OR:1.22, 95%CI:1.06-1.40, p=0.004)、食欲・食行動異常(OR:1.41, 95%CI:1.08-1.84, p=0.011)が予測因子として抽出された。

考察

介護者の約半数に PHB が認められ、BPSD を伴う認知症患者の介護家族には PHB のリスクが高いことが示唆された。患者の健康状態と BPSD の悪化、虐待に発展しないためにも家族介護者の PHB の予防対策が重要である。

介護者が義娘であるときに PHB が少なかったのは、自身の否定的な感情をコントロールしている可能性がある。介護負担感が大きいほど PHB が生じやすいことが示されたことから、介護問題の解決スキルの向上や社会資源活用に関する支援が必要と考える。BPSD 症状の易刺激性が強い場合に PHB が生じやすいことが示されたのは、敵対的態度として表現されることが多いため PHB を誘発している可能性がある。さらに食欲・食行動異常の関連性が明らかになったことから、嚥下機能、味覚、嗅覚等への治療的介入と、介護者に食事介護に関する情報提供が必要であると考えられる。

結論

BPSD を伴う認知症患者の家族介護者の約半数に PHB が認められ、介護負担感、続柄、患者の易刺激性と食欲・食行動異常が関連していた。